

地域経済研究所の廃止・統合にあたって

地域経済研究所の創立のころ

元札幌大学経済学部教授 石坂昭雄

私が経済学部長に就任した2001年当時、本当に長年の懸案だった大学院経済学研究科が何とか発足し、次ぎの課題として、研究体制をさらに充実させるための附置研究所——かつて実現寸前までいって立ち消えになった地域経済研究所——設立がいろいろの形で検討、研究されていた。しかし当時、その実現の道のりは決して平坦とは思われなかった。ひとつにはこの財政難にさしかかった時期に研究所新設を認めてもらうことが容易なことではなく、他方で既存の各学部付附置研究所を統合する総合研究所構想は正論ではあったが、合意どころか議論さえ始まっていなかった。それゆえ、私も、また学部・大学院の運営の中心の方々も、とりあえずは大学院の活動の中で予算を盛り込みながら実績を積重ねていくつもりであった。

ところが、思いがけず一気に単独の研究所設置のことが運んだのは、2002年の9月か10月の頃で、経済学部と同じ時期に大学院を設置した文化学部が、学長にあくまでも単独の大学院附置のペリフェリア・文化学研究所を要求してきたためである。事情を知った私は、この機を逃しては、研究所実現の機会は当分巡ってこないし、将来、総合研究所にもっていくにしても当面は経済の研究所が独自に成果を積み上げることを最優先すべきと判断し、すぐに教授会で

意思統一を計って当時の進藤副学長代行に経済学部も研究所新設を要求することを意思表示し、それは結局、文化学部と一緒に実現をみた。

ところでこの研究所を地域経済研究所とすることには、大学院設置計画以来の流れからいっても、誰しも異存のないところであった。ただし、私が初代の所長として、紀要の創刊号やブックレットの刊行の辞に書いたように、本研究所は歴史的視点や地域の国際比較も含めた広い視野で地域研究と取り組むことにその独自の意義を求めており、紀要もその意味をこめて『地域と経済』と名付けたと記憶している。そして、事実、わが研究所の講演会、ブックレットや紀要の論文でも、地域経済に焦点は当てられているものの、このような視点からいろいろ幅広く多彩な研究成果が盛り込まれ、この6年間、非常に有意義な活動が続けられたのが何よりである。一方、発足当初から研究所の統合構想は何度か議題に上ったものの、学部間の足並みの不揃いで一步も進まず、先送りを繰り返したため、各研究所相互の調整も協力も全く欠けていたが、われわれとしてはかえって、意思決定や計画の無用な会議や対立に無駄な時間を費やすことなく、自分たちの領域では非常に効率的に研究事業を進めることができたといえる。

(初代研究所 所長)